『西遊記』における沙悟浄の前身

工藤　真理子

日本において『西遊記』というとすぐに孫悟空を思い浮かべる方がほとんどであろう。実際、『西遊記』の中において、妖怪をやっつけ、胸のすくような活躍をし、師である三蔵法師が窮地に陥れば真っ先に救い出す等、目立っているのは孫悟空である。その一方、主要登場人物（三蔵法師、孫悟空、沙悟浄）の中で一番目立たなく、地味な存在であるのは沙悟浄である。三蔵法師の弟子の三人の中では、二人の兄弟子の影でこれといった明確な特徴を表していない。しかし、そんな沙悟浄の案外一般に知られていない一面は、彼が三蔵法師以外の登場人物のなかでは一番歴史が古い（孫悟空よりも歴史がある）ということである。なぜならば、三蔵法師が西天取経の途中砂漠で遭難しかかった時、彼の夢の中に沙悟浄の前身とされる深沙神が現れ三蔵法師を救ったといわれている。（『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』にその記述が見られる）このように深沙神は『西遊記』物語の形成の由来から玄奘と関係が深い。

いうまでもなく『西遊記』という小説は、唐の時代に実在した三蔵法師がインドへ取経に行ったときの旅行の記述がもとになっている。最初から現在の内容であったわけではない。今の形になるまでに色々なテキストを経てきている。その後、民話や伝説を折りまぜ長い年月と多くの人々の手を経て今の形になったのである。

ここでは、『西遊記』物語の発端から三蔵法師と共に登場する神沙神に焦点を当ててみたい。神沙神とは密教の神様であり、『西遊記』物語の成立に関係の深い『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』、『大唐三蔵取経詩話』の中に登場する。

『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』によれば、三蔵法師がインドへの西天取経のために高昌国に向かう途中、砂漠で遭難しかかる。その時、三蔵法師の夢の中に神沙神が現われ渇きに苦しんでいたのを救ったという。短いものであるが、その部分は以下のようである。

ここから先は、すなわち莫賀延磧である。長さは八百余里で、古くは沙河といった。空にはとぶ鳥もなく、地上には走る獣もなく、また水草もない。この時、

ただ一つ自分の影があるのみである。ただ観世音菩薩と『般若心経』を心に念じた。……中略……ところが睡眠中、夢に身のたけ数丈の一大神が現われた、戟をとってさしまねき、「どうして強行せず、更に寝ているのか」と言った。法師は驚いて眼がさめ出発した。数里ばかり行くと、馬は忽ち異った道を行く。法師が制止しても廻らない。数里行くと、急に青草のある数畝（一畝は約五百平方メートル）の草原に着いた。馬を下りて思う存分草を食べさせ、草原から十歩ばかり進んで引き返そうとして池を発見した。

（『玄奘三蔵』慧立・彦悰　長沢和俊訳　光風社出版　一九八八年より波線部―引用者）

神沙神という神様は、玄奘との出会い以降の話のみしか伝わっておらず、「身のたけ数丈の一大神（波線部参照）」、いわば荒々しいイメージを持つものとして描かれている。ここでの深沙神は、あくまでも玄奘が遭遇する数々の困難の一つを排除するいわば彼を手助けする守護の役割をもっている。また、深沙神の登場する場所は、当然の事ながら「砂」からの登場である。これは、次で取り上げる『大唐四蔵取経詩話』に出てくる深沙神とイメージが似通っている。

『大唐三蔵取経詩話』の深沙神の登場するところは第八章である。ここでの深沙神は、首に二つのしゃれこうべをかけ、通り掛かる旅人を食べていたとあり、三蔵法師が西天取経の途中、砂漠をとおりかかると、神沙神が三蔵法師を食べようとし、一行の邪魔をする。しかし、その時、三蔵に「まだ、悔い改めないのなら、一族を全滅させてしまうぞ。（波線部―引用者）」と言われる。そうすると、彼は三蔵に降伏し砂漠を渡るために金色の橋を掛け三蔵ら一行を渡す手助けをする。その後、神沙神は取経の旅には加わらず、法師ら一行をそこで見送るとある。（過去に二度、三蔵法師を食べたという記述もある）

波線部のように一族らしきものが存在し深沙神がその中の中心人物らしい様子が窺える。また、『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』の中で記述される深沙神とは異なるのは、ここでの深沙神は最初から悪者であり、三蔵法師たち一行の旅を邪魔する存在として描かれていることである。玄奘を救う立場であったのが、ここでは三蔵を二度食べてしまう悪者になってしまっている。深沙神の首をかけている袋の中の髑髏の数は、玄奘が前世において彼に二度食べられたことを示している。これは、後の明刊本『西遊記』（今、私たちが読んでいる『西遊記』物語のことである）において数が増える。

言うまでも無く、深沙神はのちの沙悟浄に比べ、ろくに活躍の場も与えられていないだけでなく、取経の旅にも加わらない。三蔵たち一行が取経の途中で遭遇する困難や災難の一つとしてのみ描かれている。深沙神が、三蔵に出会い彼に諭されると誠に拍子抜けするくらいあっさりと三蔵の前にひれ伏して許しを請う。単純明快な話の運びが行間に感じ取れる内容である。

玄奘たちを渡す方法にしても、明刊本『西遊記』の沙悟浄とは大部異なる。玄奘たち一行を流砂河を無事に通過させるためには、深沙神は金色の橋を架ける。髑髏は、使われない。砂漠に橋を架けるというのは、随分と不自然なことに思うが「橋をかける」とある。普通、橋というと川に架けるか、山間部において橋を架けるというのが一般的なイメージであると思う。そう考えると明刊本『西遊記』の中で橋を架けてもよさそうなものであるがそうはなってはおらず法船で渡るという

事になる。「橋を架ける」という行為が生きているのは、ここだけであり後世にはこの記述はなくなっている。

ここでの深沙神のイメージは砂漠に住み、取経に来るものを食べてしまい、一族らしきものの存在があり彼は、その中の中心を占めているようである。特に、砂漠のイメージから私の全く勝手な想像であるが、まるで砂の中で獲物の蟻が来るのを待っている蟻地獄の主をイメージしてしまう。蟻地獄にはまる獲物は、取経途中の三蔵であり、待ち受けるのは深沙神であると考えるからである。勿論、色々異論もある事であろうがそうおかしくないと思う。

以上のように、二つの文献における沙悟浄の前身である神沙神は、だいたいこういうイメージであると考えられると思う。

〈主な参考文献〉

『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』慧立・彦悰　中華書店　一九八三年

『玄奘三蔵』慧立・彦悰　長沢和俊訳　光風社出版　一九八八年

『大唐三蔵取経詩話訳注』志村良治

愛知大学・文学論叢第19・21輯

文芸科賞（第十八回）について

文芸科賞は、課外の創作・評論活動における優れた成果を顕彰するために、応募作品中、優れた作品を提出した文芸科学生に贈られる。

平成八年一月三十一日締切りの今回、応募作品は小説七編、詩一編、文芸評論一編、童話二編の合計十一編であった。文芸科教員全員による選考の結果、文芸評論「『星の王子さま』を読んで」に対し「佳作」を、また小説「星の輝く真昼の空」、小説「孵化音」、童話「鳶は泣いた」の三作品に対して「奨励賞」をそれぞれ贈ることに決定した。残念ながら、今回も「文芸科賞受賞者なし」の結果となったが、応募作品も増え次回に期待を抱かせた。

選考結果は、平成八年三月の文芸科卒業生および、同年四月の文芸科ガイダンスの席上にて発表された。受賞作品・作者名は次のとおりである。

佳作　（文芸評論）

『星の王子さま』を読んで　二年　橋本　麻美子

奨励賞　（小説）

「星の輝く真昼の空」　一年　涌坪　幸子

奨励賞　（小説）

「孵化音」　一年　大本真規子

奨励賞　（童話）

「鳶は泣いた」　一年　山際　緑

なお、第十九回文芸科賞募集は平成九年一月三十一日、応募者多数のうちに締切られた。

また、第二十回、文芸科賞募集要項は、93ページに掲載。